上野原縄文の森第37回企画展

新発見! かごしまの遺跡2013

県立埋蔵文化財センター 発掘速報展

特展データファイル 37
2013. 9 .13.～2013.12.1.

■　お問い合わせ
（公財）鹿児島県文化振興財団
上野原縄文の森
〒 899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森１－１
TEL 0995-48-5701　FAX 0995-48-5704
URL　http://www.jomon-no-mori.jp
E-mail　uenohara@jomon-no-mori.jp

平成24年度に発掘調査を行った13遺跡及び報告書を刊行した7遺跡の中から最新の情報を紹介しています。

今回の企画展では，天神段遺跡で出土した西日本最古の「石剣」（縄文時代前期）など注目された資料を展示し，身近な遺跡の最も新しい成果を紹介しています。併せて，市町村教育委員会が担当した鹿児島市不動寺遺跡，南さつま市清水前遺跡，霧島市城山山頂遺跡，喜界町崩リ遺跡，天城町戸森線刻画の資料も，関係機関の協力を得て展示しています

また，11月からは，堅野（冷水）窯跡出土の白薩摩（椀・皿）などを期間限定で展示します。

西日本最古の石剣！

昨年度の調査で，曽於郡大崎町に所在する天神段遺跡から「石剣」とよばれる石器が出土しました。頁岩という素材の石からできており，長さが約35cm，幅 2.9cm で全面が磨かれています。出土した層や周辺から出土した他の土器の種類（曽畑式：約 5500 年前）から，縄文時代前期のものと考えられます。この石剣は，先端や側面が鋭利に加工されていないため，実用的な武器ではなく，儀式に使われていたのでないかと推察されます。形の特徴から，東日本で見られる石剣（縄文時代早期～前期）に類似していることから，東日本との交流も考えられる貴重な資料です。

中央　西日本最古の石剣（天神段遺跡，大崎町）

鹿児島県内出土の石剣類

西日本では，縄文時代の後晩期の出土例はありますが，縄文時代前期の出土例はないため，西日本最古の石剣と言えます。

縄文時代の石剣は，石棒や石刀，土偶と並んで，縄文時代の精神文化をあらわす遺物といえます。石剣，石棒，石刀は主に縄文時代の後期から晩期にかけて多く出土し，まとめて「刀剣形石製品」とよばれます。

展示資料データ	遺跡数	展示資料数	展示パネル数
	26	238（一括展示含む。）	102

土器が置かれた連穴土坑

志布志市にある高吉Ｂ遺跡では，連穴土坑の中から完全な形に近い土器（石坂式系土器）が出土しました。立ったままの状態で置かれたものであり，底は抜けていました。高吉Ｂ遺跡と類似した例として，宮崎県椎屋形遺跡で縄文時代早期前半の円筒形土器がほぼ完全な形で出土しました。

土器が置かれた状況から，

① 底がないので，カマドのように土器で煮炊きしたとは考えられない。

土器が置かれた連穴土坑（高吉Ｂ遺跡，志布志市）

② 底がないので，土器を焼く施設とは考えられない。

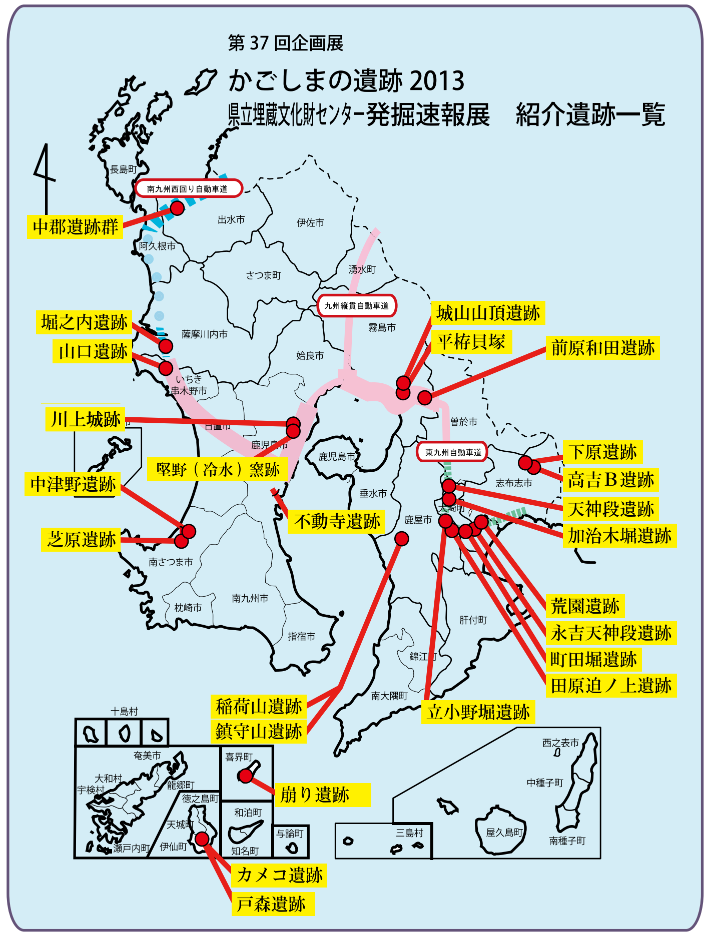
③ 連穴土坑に対して，感謝するとともに悪いことが起こらないように，底のない土器を供えて祈った。

④ 連穴土坑を使わない時期に，トンネルの崩壊を防ぐために土器を置いた。

などが考えられます。

底のない土器が置かれていたことについて，みなさんはどのように推理しますか？

復元した連穴土坑



堅野（冷水）窯跡の出土遺物

堅野（冷水）窯跡は，1978（昭和53）年に発掘調査が行われました。鹿児島市冷水町にあり，薩摩藩が主導した窯で，江戸時代初期から18世紀後半まで使われたと考えられています。

出土品の中で注目されるのが，技巧的にも優れ，現代でも通用するような斬新なデザインの白薩摩焼です。同じような製品は，鹿児島（鶴丸）城跡ではほとんど出土せず，東京都港区芝３丁目にあった薩摩藩島津家屋敷跡第２遺跡から出土しています。

出土した白薩摩焼とモチーフになった貝

凝った形の口縁部

塞ノ神式土器は，ラッパ形に開く口縁部が一般的ですが，薩摩川内市の山口遺跡では，先端部を内側に折り曲げている土器がまとまって出土しました。

同じような形の土器は，これまでも南九州市の石坂上遺跡や伊佐市の永山遺跡で出土しています。

土器の中に入った木の実などが，水と一緒に流れ出ないように，口縁部を内側に折り曲げたとも想像されます。薩摩半島の北部，中部，南部で出土していることから，この形の土器をもったグループが，各地を移動しながら生活していた可能性もあります。

塞ノ神式土器（山口遺跡，薩摩川内市）

平栫式土器（平栫貝塚，霧島市）

河口コレクション 平栫貝塚

霧島市の平栫貝塚は，現在は公園になっています。昭和46年に発掘調査が行われ，貝がまとまった地点や土器などが見つかりました。ここで出土した土器は，平栫式土器と名付けられ，上野原遺跡の7,500年前の壺形土器なども同じタイプのものです。

平栫式土器は，南九州ではほとんど見られない縄を転がした文様を持ち，深鉢形のほかに壺形の土器が出土することもあります。このタイプの土器は，九州一円はもとより，鳥取県や兵庫県でも見つかっています。

弥生集落の展開を探る

大隅半島で，約2,200年から2,000年前の集落跡が相次いで見つかりました。大崎町の永吉天神段遺跡は弥生時代中期中葉，鹿屋市の田原迫ノ上遺跡は弥生時代中期後葉の時期の集落跡です。二つの遺跡を比較することによって，大隅半島の弥生時代中期における集落の変遷を知ることができます。

立地，住居軒数，住居形態，他の遺構，出土遺物，砥石と鉄器の量，肥後系と北部九州系の土器など，両遺跡の相違を明らかにしていきたいと考えています。

田原迫ノ上遺跡出土品（鹿屋市串良町）

鹿児島県内出土の希少な青銅器

芝原遺跡出土品（南さつま市）

鹿児島県内で弥生時代後期以前の青銅器が出土しているのは，志布志市有明町の銅鉾と伊佐市下鶴遺跡の銅戈だけです。

弥生時代終末期になると，小型仿製鏡（日本製の小さな鏡）や破鏡（分割されて配られた鏡）などが出土しますが，非常に希少なものであることに変わりはありません。銅製品は，さらに出土例が少なく，銅鏃が出土した例は，南さつま市の芝原遺跡と鹿児島市の不動寺遺跡だけです。

水辺の自然の猛威を鎮める

万之瀬川岸にある芝原遺跡と永田川に近い不動寺遺跡は，ともに弥生時代終末から古墳時代初頭の遺跡で，水辺から完全な形の土器や鏡などが出土しました。３世紀のこの時期は全国的に冷温多雨であり，たびたび洪水が発生していたようです。この洪水を鎮めるために，水辺で祭祀を行った時の道具が土器や鏡と考えられます。

最近の研究では，この時期に大きな地震による津波の痕跡も各地で見つかっています。人の手が及ばない自然の猛威に対して，３世紀の人々はひたすら祈りを捧げたと思われます。

不動寺遺跡出土品（鹿児島市）鹿児島市教育委員会蔵

鉄をつくり，鉄の道具をつくる

日本に鉄製品が伝わったのは，約2,800年前(弥生時代早期)のことです。弥生時代から古墳時代までは，主に朝鮮半島から鉄の素材を取り寄せ，日本では加工（鍛冶）だけを行っていました。

日本で製鉄が始まるのは，弥生時代終末から古墳時代中頃であり，広島県や岡山県で鉄鉱石を原料とした製鉄炉が見つかっています。精錬滓と呼ばれる，鉄鉱石や砂鉄を溶かす時に出てくる特有のクズが証拠となります。

崩リ遺跡出土品（喜界町）喜界町教育委員会蔵

喜界島の崩り遺跡では，１２世紀に製鉄が行われていたことがわかりました。製鉄の材料となる砂鉄は，種子島から運ばれた可能性があります。崩リ遺跡でつくられた鉄素材は，奄美諸島から沖縄にかけての鉄製品の流通に寄与していたようです。